

真剣に「無駄」をしよう — 私の大学観

小西 一雄

立教在職中に私は学部や大学院の専門科目以外にも時々1年生対象の入門系の科目、「基礎演習」とか「経済学」なども担当しました。全カリでは「世界経済と日本」「市場と社会」そして今年度の新設科目である「経済学の基礎」という科目を担当してきました。全カリの対象者は1年生から4年生までらばっているわけですが、やはり1年生の履修者が多いので、教える際には1年生も聴いているということが常に念頭にありました。というわけで、ここでは1年生対象の導入教育のような場において、あるいは学部ゼミに新しく入ってくる2年生に対して、私が時々どのようなメッセージを発してきたかということの切り口にして、私なりの大学観を書かせてもらおうと思います。ただ、あらかじめお断りしておくと、これから話すことは経済学あるいは社会科学限定の話であって、この話が自然科学や人文科学の分野で、とくに自然科学の分野どれほど当てはまるかは全く自信がありません。

本の「奥付」を気にしたことはありますか

「試験にでないものは覚えるな」——

これは、私の青春時代にベストセラーであった有名な英語の受験参考書に出てくる標語です。たしかに、受験勉強に必要なものは、効率的な勉強と一義的な解答を見出す訓練です。受験勉強は別としても、高校までの勉強では多くの場合、決められた「教科書」を基準とした一義的解答が求められてきました。受験勉強

では、これに効率性が加わるわけです。

試験に出ないものを勉強することは無駄であり、しかも、一義的に解答の見出せないものはそもそも入試で出題されないだろうから、受験勉強の合言葉はどうしたって「無駄をするな」ということになります。某有名英語受験参考書はかくてロングセラーとなったのでした。

もっとも、こうした勉強が無意味だといっているわけではありません。一義的解答という点でいうならば、何事であれ、基礎的な勉強はまずは「教科書」で勉強し「覚える」ことから始まります。この点では受験勉強も大いに役立ちます。

しかし、こうした事情を踏まえて、私は新入生や新ゼミ生によくこういう問いを發しました。

「皆さんは本の奥付を気にした経験がありますか。奥付には著者、出版年、出版社などが記されていて、またその周辺には著者略歴などがついています。さらに、本の「はしがき」や「あとがき」の類もちゃんと読んでいるでしょうか。」

「読んでいない」というのが私が予想し期待している答えなのですが、時々ちゃんと読んでいるという学生が出てきて話の展開に失敗することもありました。しかし多くの場合、高校までの教科書では、出版社名の記憶を除けば、おそらくそういう経験はほとんどなかったという話になります。「教科書」に書いてあることは「正しいこと」、あるいはすくなくとも「スタンダードな見解」であろうということが無意識にも前提としてあるわけですから、いきなり本文に突入するということになるわけです。そしてこの意識は大

学にまで持ちこされてきます。多くの学生は授業やゼミで使う本を無自覚に「教科書では」と表現します。授業で使う本を教科書というのはまあ許せたとして、基礎演習や学部ゼミで自分がレポートに使った参考文献まで「教科書では」と言われると、たちまちにして「ちょっと待った」ということになります。

この冊子の読者の皆さんには釈迦に説法ですが、啓蒙書であれ学術書であれ、奥付や「はしがき」などは本文に劣らない重要な情報です。いつ、誰が、どこで、どのような問題をたてて、どのような根拠と筋道をもってその問題を分析しているか。大学で出会う多くの文献は、こうしたことに注意を払いつつ、その内容の「真理性」を読み手自らが検証するような態度で、つまり批判的な意識で取り組むべきものです。それは覚えこむべき一義的な解答が与えられている「教科書」に対するものとは大きく違います。もちろん、大学でも教科書的な知識・訓練が必要な膨大な領域があります。でもそれは大学での勉強の到達点ではありません。大学の醍醐味はむしろその先にこそあるのではないのでしょうか。

その先にあるものとは、自分が学び、考え抜くに値するテーマに出会うことです。これこそは大学での勉強を楽しく深いものにするか、受動的な学習にとどまるかの分岐点です。それは一義的な解答に効率よく到達することでも、あるいは既存の知識を覚えこむものでもなく、膨大な文献や情報と格闘しながら自分の問題意識を形成する過程での出会いです。世の中には大事なことなのに十分に解明されていない事柄、あるいは間違っていて理解されている事柄が多くあります。そのひとつにでも出会い、それを学び、自分の頭で考え抜くこと、このクリエイティブな過程こそが大学で学ぶ醍醐味であり、結果として解が得られなくても、大きな充実感と成長を味わえるのではな

いでしょうか。

「100年に一度」の醍醐味

いま経済学の世界は、こうしたテーマに出会うのにまたとない時代の只中にあります。2007年8月にアメリカの低所得者向け住宅ローン（サブプライムローン）の焦付きの問題が顕在化してはじまった今回の世界的な金融・経済危機は、2008年9月のリーマンブラザーズ（アメリカの代表的な投資銀行のひとつ）の破綻を経て、第二次大戦後最悪の世界的な金融・経済危機になりました。大きな金融機関、企業が倒産し、失業者が増大し、財政が破綻し、経済成長がマイナスになるというような危機が続きました。最近は少し落ち着いてきましたが、「100年に一度の危機」といわれた事態はまだ終わっていません。これは生活者としては一日も早く終わって欲しい事態ですが、研究者としては息を呑むようなスペクタクルが連日のように展開されているきわめて興味深い事態です。

各国の政府や中央銀行が禁じ手とも思えるあらゆる政策手段を動員し、その政策効果も副作用も読みきれないということが続いています。経済学は自然科学とは異なり、実験も顕微鏡を覗くこともできません。しかし、現在展開されている事態はまさに実験を目の当たりにするかのようです。こうした事柄が教科書的な学習だけで解明できるはずがないということは、若い皆さんにも直感的に分かってもらえると思っています。

もっとも、学生がいきなりこうした問題の全体像に挑もうとしても、それは初心者がいきなりヒマラヤに登ろうとするようなもので、意気は買えますが無謀です。やはり大きな問題意識を大切にしながら、より限定的な課題から入るほかはありません。

「効率よく学ぶ」ことの意義と限界

ところで、先ほどテーマとの出会いは「膨大な文献や情報と格闘しながら自分の問題意識を形成する過程での出会いです」と書きました。しかし、この「格闘」が無手勝流のものでは困りますし、すくなくともそれは「効率的」ではありません。ここまで書いてきたことと一見矛盾するようですが、大学でも「教科書」はやはり必要になります。この点で、理学部の学生はよい意味での「教科書の威力」をみせてくれているように感じます。学部で1年間学ぶと理学部の学生は相当に専門性を身につけてくるようです。少なくとも経済学部の学生とくらべると、当該分野のテクニカルタームや思考法をはるかによく身につけているように感じます。その一因は彼らが定評ある教科書で学んでいることにあるのではないのでしょうか。たとえば最新の物理学の教科書を学べば、人類がこれまでに到達した物理学にかかわるさまざまなパラダイムがほぼ過不足なく見渡せるのではないのでしょうか。もちろん、世界観や理論の違いがもたらす異論や対立はあるのでしょう。しかし学生達はニュートンやアインシュタインなどの古典そのものを読まなくても、過去の人類の膨大な成果を最新の教科書で学ぶことができるのではないのでしょうか。

残念ながら経済学の分野では、「過去の人類の膨大な成果を最新の教科書で学ぶ」というわけにはいきません。どんな優れた教科書でも、それはどこまでいっても著者たちの理論的な立場に応じた限られた視野で書かれています。ですからAという教科書では重視されている事柄が、Bという教科書ではほとんど取り上げられない、というようなことが頻繁にでてきます。どうしてそういうことになるかはここでは置いておきますが、良い教科書というのはむしろ著者の理論的

立場の特徴が明示的、あるいは自覚的に示されているものだといってもよいと思います。いずれにせよ、経済学の分野で良い教科書とは何かということは、はなはだ厄介なテーマです。しかし、これまでの経済学の歴史のなかで、もっとも有名な教科書があります。ミスター資本主義と呼ばれたP. サムエルソンの『経済学』です。

かつて1960年代から70年代にかけて経済学を学んだ世代の多くは、このサムエルソンの『経済学』を学びました。これを学び理解すると経済学的思考ができる専門家の卵が生まれます。そこで使われているテクニカルタームや思考法を身につけると学界で共通言語を話せる人間と認められるわけです。そしてアメリカを中心にそれまでよりもはるかに大量の経済学者、あるいは官界や経済界で仕事をするエコノミストが生み出され、またシンクタンクが生まれました。これは経済学の「制度化」といわれています。そして制度化された経済学の中で、論文の量産システムも確立されていきます。その後サムエルソン『経済学』は主役の座から降りますが、経済学の「制度化」はさらに進展しました。

だがここで、少し困ったことが生じました。トータルな問題に取り組む研究者が減り、細分化した、良くいえば専門性の高い、悪くいえば瑣末なテーマの研究者が量産されていくことになります。それはひとつには職を得るためには論文を量産しなければならないというまさに経済的な事情からであり、短期間に量産できるテーマや研究手法が選ばれようという事情です。しかし、より根底には、彼らが研究者になる過程で「教科書」を使って効率的に経済学を学ぶことに習熟してきたという事情があるように思われるのです。古典とじっくり付き合いながら「格闘」する過程、あるいは膨大な文献や情報と格闘しながら自分の問題意識を形成する

過程、こうしたプロセスが疎かにされてきたからではないかと思うのです。「効率性」の世界からはいわば受験秀才のような人は育ったが、クリエイティブな研究者は育たなかったということでしょう。

「無駄」の大切さ

繰り返しになりますが、テーマと出会う喜びを味わうための効率のよい勉強法などはありません。それは試行錯誤の連続です。その意味では「無駄」の積み重ねでもあります。このことは研究者になる人だけでなく、企業社会に出ていく圧倒的多数の学生にとっても重要なことだと思います。そして、大学の講義やゼミはこうした試行錯誤のための基礎知識や手がかりを与えてくれます。しかし、重要なことは講義を手がかりとしてどこまで自分で多くの文献や資料と格闘するかです。だから大学に入学したら、あえて「無駄」をする「努力」、いいかえれば「真剣に無駄をする」ことが大切なのだと思います。大学時代とは高額な授業料を払ってこのような「真剣に無駄をする」ゆとりの時間を買っている、そのような人生唯一の時期なのではないでしょうか。

というわけで、「真剣に無駄をしよう」というのが私が新入生や新ゼミ生に呼び掛けるメッセージなのですが、先にふれたように、このことは教科書でしっかり「効率よく」学ぶということと対立するものではありません。その点で、教師の側はよい教科書、教材を提供し、系統的なカリキュラムを提供して、効率よく学ぶ環境を整備していくという重要な仕事があるわけですし、立教大学がこの努力を精力的に行っているのはご承知のとおりです。

ただ最近少し気になるのは、経済学の分野でも学外のいろいろな検定制度が普及してきたことです。検定というの

は学生の学習の到達度を示す分かりやすい指標であり、社会的にも今後重視されていくだろうと思いますし、経済学部もこれに正面から向き合うことが必要だと思います。ただ、こうした検定試験はそれを意識した試験勉強の組織化というプロセスを辿りがちであり、一義的解答に効率よく到達する訓練を強化することにつながりがちです。そして「真剣に無駄をする」ような過程は客観的評価が難しいものであり、およそ検定試験で到達度を示すことのできないものです。検定試験に限らず、いわゆる「大学教育の質の保障」という考え方が、「真剣に無駄をする」大学教育の重要な側面を押しつぶすことがないように思うのです。

ところで「無駄」ということについてみると、実は大学の教員も「真剣に無駄をする」ゆとりのある時間を必要としています。研究もまた試行錯誤の連続であり、研究テーマや研究方法にもよりますが、基本的に効率性とは異質な世界です。この点、立教大学は非常に恵まれた職場です。ただ近年、他大学も同様ですが、研究における「競争的資金」の獲得ということが重視される傾向がますます強まっています。私自身の研究スタイルがあまり経費のかからない古いスタイルだからかもしれませんが、個人的な感覚でいうと、私はこの言葉はあまり好きではありません。先に経済学の「制度化」の功罪に触れましたが、競争的資金の獲得という視点は、それが独り歩きすると研究の在り方にあるバイアスをもたらすのではないかという危惧を感じています。

ともあれ、「真剣に無駄をしよう」という呼びかけは学生諸君にだけ向けられているのではなく、私自身にも、そして教員の皆さんに対しても発しているメッセージなのかもしれません。そこで、最後にちょっと脱線をして、この「無駄」ということを大学経営という視点からみ

ておこうと思います。

株式会社大学の教訓

小泉構造改革の一環として学校法人ではなく株式会社組織の大学の設立が推進され、2004年以降こうした大学が実際に動き出しました。結果は惨憺たるもので、軒並み失敗に終わっているといってもよいでしょう。ここで興味深いのは、資格試験のための予備校としては成功し、利益を挙げている株式会社、大学では経営が成り立たなくなっているという事情です。つまり予備校は営利企業として成り立つが、大学は営利企業として成り立たないという事情です。同じ教育産業なのにこの違いはどこから生まれるのでしょうか。

株式会社、とくに株式を公開している会社の経営目標は増収・増益です。つまり、毎年売上高を伸ばし(増収)、利益を増加させる(増益)ことが経営者に課せられた使命であり、増収・増益を実現して株価を上げ株主に利益を還元することが求められます。これに対して大学などの学校法人は、そもそも増益を図り利益を関係者で分け合うことを目的としておらず、そうした行為自体が禁止されています。企業の利益に相当するものは帰属収支差額と呼ばれますが、これを毎年増加させることが求められているわけでもありません。教育施設を改善し、新たな教育プログラムを展開するなど、大学経営の維持・発展のために一定の帰属収支差額が必要ですが、毎年これを増加させることは目的ではなく、大学はいわば「定益」状態でよいわけです。また収入の面でも、受験者の増加、寄付金の増加、補助金の増加といった要素はありますが、基本となる学生納付金は収容定員数によって決まっています。収容定員を毎年増加させていくわけではありませんから、増収ということではなく「定

収」ということになります。一言でいえば学校法人の経営は「定収・定益」だということになります。そして大学間の競争はありますが、それは株式会社が「増収・増益」のために競争しているのとは異なり、ひたすら教育の質の向上のために競い合っているわけです。もちろん、営利企業もたとえば製品の質を向上することを追求しますが、それが「増収・増益」に繋がらなければ意味がありません。しかし大学における教育の質の向上はそれ自体が直接の目的です。こうして人件費の在り方について株式会社と学校法人とでは正反対ともいえる経営姿勢が出てきます。よい教育をするためには学生数に対する教職員比率は一般的に高いほうがいいし、教員に十分な研究時間を与えかつ十分な科目数を展開するためには、教員数も多いほどよいということになります。もちろん、大学も経営体として維持していく以上、人件費比率を帰属収入の50%程度に抑えるというような経営目標を立てなければなりません。その範囲内で出来る限り質の高い教職員を一定数確保しようとしています。一方営利企業では、競争戦に打ち勝ち増収・増益を図るためには労働生産性を上げることが重要であり、いかえれば同じ収入・収益を出来る限り低い人件費で実現することが必要となり、経営にとっては常に合理化というインセンティブが働きます。ましてや「真剣に無駄をさせる」ような余地はまったくないのであり、万事効率性こそが求められるわけです。

こうしてみると、大学教育に営利企業の論理をそのまま持ち込むこと、ましてや株式会社組織を持ちこむことはまったく論外だということになります。では、なぜ予備校は営利企業として成り立つのでしょうか。予備校は一義的解答に効率よく到達することを訓練する機関です。そこでは大量の予備校生に対して、大学の科目数やコマ数とは比べ物にならない

くらいの少ない科目数とコマ数が提供されます。そして、教材開発に携わる専門職やスター講師には高額の報酬を与え、その他の教職員は出来る限り少人数を安い賃金単価で雇います。つまり教育内容だけでなく経営においても効率性の追求が可能な組織です。

ちなみに、中高校でも学校よりも塾のほうがよい教育をしているという人がいます。現在の中等教育を擁護するつもりはありませんが、そもそも塾や予備校と学校とでは同じ教育といってもその内容や目的とするとところは相当に違うのだということ、このことを無視して論じるのはいかがなものかと思います。

効率よく一義的解答にたどりつく勉強と真剣に無駄をする勉強との間には大きな違いがあるのですが、しかしそこには連続性があります。そして大学の内部でもこの両者が必要です。しかし、大学の大学たるゆえんは、やはりこの「無駄」がどれだけ大切にされているかではないか、と思うのです。

以上

こにし かずお
(本学経済学部教授)